

奥田宏司教授，加藤恒彦教授，松下洸教授の ご定年にあたって

本学部の奥田宏司教授が，2012年度末をもってご定年を迎えられます。教授は，1947年10月のお生まれで，1977年に京都大学経済研究科博士課程を単位取得退学されたのち，1988年の学部創設と同時に立命館大学国際関係学部にて助教授として赴任され，1990年には教授に昇任されました。まさにわが学部の歴史とともにこの四半世紀を歩んでこられたということが出来ます。

国際関係学部ならびに研究科では，国際金融論，ゼミ，基礎演習，国際関係資料研究，国際金融論特講，後期課程の指導，等を担当してこられました。その間，以下のような学部学生用テキストの作成にご尽力されました（いずれも共同編著）。すなわち，『国際金融のすべて』1999年，『ニューフロンティア 国際関係』2006年，『エティック 国際関係学』2011年。さらにはご専門の国際金融に関連して，『現代国際金融』2006年，『現代国際金融 第2版』2010年などがそれです。このように，奥田教授の学部教学に対する貢献には絶大なるものがあります。

さらには，1995年度に学部主事（現在の教学担当副学部長），1999年度に研究科主事（現在の大学院担当副学部長）を務められた後，2001年から3年間，学部長・研究科長を兼任されました。国際関係研究科が大きく変貌を遂げようとするこの時期に，改革の先頭に立ってご奮闘いただいたことを心より感謝いたしたいと思います。

また，奥田教授の研究成果に関して申しますと，1988年刊行の『多国籍銀行とユーロカレンシー市場』を嚆矢とした単著7冊をはじめとして，文字通り枚挙に暇がないほど膨大なご業績を積み重ねられてこられました。おもな研究テーマは，ドル体制の成立・展開過程と83年以後の変容・後退過程の分析であり，これにかかわって『円とドルの国際金融——ドル体制下の日本を中心に』2006年，『ドル体制とユーロ，円』2002年，『両大戦間期のポンドとドル』1997年，『ドル体制と国際通貨』1996年，『ドル体制の危機とジャパンマネー』1992年，など多くの著書を出版され，当該分野で日本を代表する研究者でいらっしゃいます。

加藤恒彦教授もまた，2012年度末をもってご定年を迎えられます。教授は，1947年12月のお生まれで，1972年に大阪市立大学大学院文学研究科修士課程英文学専攻を修了されたのち，1983年に立命館大学産業社会学部助教授として赴任されました。その後，1988年に学部創設

と同時に立命館大学国際関係学部に移られ、1990年に教授に昇任されました。加藤教授もまた、わが学部の歴史とともにこの四半世紀を歩んでこられたわけです。

加藤教授は着任以来、おもに立命館大学産業社会学部、および国際関係学部において英語科目を中心として担当され、本学の言語教育の発展に貢献されてきました。それまでの豊かな言語教育経験を背景として、基本4技能の低回生レベルにおける習得にとくにご尽力されるとともに、ご専門の黒人文学を教材として活用しながら、国際関係学部教学の一つの重要な柱である異文化理解教育にも大きな功績を残されました。また、国際インスティテュートの英語教育に対する貢献にも特筆すべきものがあります。

また教授は、1998年度に学部主事、2003年から2年間にわたって評議員、2004年から4年間にわたって国際部副部長、さらには2008年から2012年に至るまで国際インスティテュート主事をお勤めいただくなど、国際関係学部と立命館大学全体の国際化に多大なる貢献をなされました。2011年度から学部で開始されましたグローバル・スタディズ専攻の先駆けとなるご活躍と申せましょう。

加藤教授のご研究に関して申しますと、ご専門はアメリカ黒人文学、イギリス黒人文学、インド英語文学であり、70年代以降のアメリカ黒人女性作家の動向の分析とその社会的意義をご研究され、黒人女性作家、アリス・ウォーカー、トニ・モリスン、グローリア・ネイラー、ポール・マーシャル、テリー・マクミランの作品の意味と意義を検討してこられました。その成果は、『トニ・モリスンの世界』1997年、等3冊の研究書に集約され、またイギリス黒人文学については『キャロル・フィリップスの世界——ブラック・ブリティッシュ文学の現在』2008年、となって結実しました。その他、学術論文の出版に関しては、枚挙に暇がないほどです。

松下冽教授もまた、2012年度末をもってご定年を迎えられます。教授は、1947年9月のお生まれで、1985年に明治大学大学院政治経済学研究科政治学専攻博士後期課程を満期退学されたのち、1997年に立命館大学国際関係学部教授として赴任されました。学部創設以来10年が経過し、国際関係学部が氷室の西園寺記念館からここ衣笠の地に移り、それ以来大きな飛躍を遂げていく過程を、学部とともに歩んでこられました。

教授は着任以来、おもに国際関係学部の途上国政治論、ラテンアメリカ研究にかかわる科目をご担当いただいてきました。また、少人数クラスに関しても、基礎演習、専門演習はもちろんのこと、2回生の中核的な少人数クラスであった国際関係資料研究において古典的な作品を中心とした講読を通じて、学生諸君に深い理論的・実証的思考法を伝授してこられました。また、大学院科目においても多くの国際学生に慕われ、教授のAdvanced seminarはいつも人気のゼミでありました。このように、松下教授の本学部教学に対する貢献には絶大なるものがあります。

また教授は、2004年度に研究科主事、2005年度に国際関係学部副学部長、2009年から2011年まで2年間にわたって大学協議会委員をお勤めになられました。学部教学がようやく安定期を迎えつつある中で、その土台を打ち固める役回りとして大きな手腕を発揮されました。

松下教授の主たる研究テーマは、発展途上国比較政治体制論であり、戦後のアジア、アフリカ、ラテンアメリカの政治体制を、たんに権力構造にとどまらず、新しい社会・政治アクターをも組み込んで総体的に比較・分析することを主眼にこれまで研究活動を続けてこられました。その成果は、『現代メキシコの国家と政治——グローバル化と市民社会の交差から——』2010年、および『グローバル化とリージョナリズム』2009年、となって結実しました。また教授は、多くの若手研究者を集めて翻訳物を出版することに非凡な才を発揮され、それはダニエル・アーキブージ『グローバル化時代の市民像——コスモポリタン民主政へ向けて——』2010年、グレッグ・グランディン『米国のラテンアメリカ、中東政策と新自由主義の深層』2008年、など多数に及んでおります。

わたくしたち国際関係学部教職員一同は、立命館学園とわが国際関係学部に対する奥田教授、加藤教授、松下教授のこれまでのご貢献に対して、篤く御礼を申し上げますとともに、今後ますますのご健康と、ご研究の発展を願うものです。お三人の先生方とこれから教授会で席をともにできないことは、われわれの何よりの悲しみとするところでありますが、先生方のお残しになられたさまざまの足跡を今更のようにたどりながら、今後一層学部・大学院の発展に邁進させていただくことをお約束いたしまして、はなむけの言葉とさせていただきます。

2013年3月

立命館大学国際関係学部長 板 木 雅 彦

